優秀賞

メダカの飼育に挑戦中！

岩手県北上市立北上中学校
三年　藤原　聖也

私は今、メダカの飼育と繁殖に挑戦しています。成魚が十四匹、幼魚が三十匹ほど、稚魚が四十匹ほどいます。オレンジや白、青といった色とりどりなメダカ達もいて、見ているだけで飽きません。

私がメダカを飼い始めたきっかけは、向かいの家のおじさんにメダカの稚魚を分けてもらったことです。おじさんの家の庭にはいけすがあります。そこでは稚魚や幼魚、成魚用に、それぞれ小さく区切られた場所で、たくさんのメダカが泳いでいました。その稚魚用のいけすから、バケツいっぱいに稚魚をもらいました。最初はメダカに特別な興味があったわけではありませんでしたが、もらったからには出来るところまでやってみようという探求心から、私のメダカの飼育が始まりました。

メダカの飼育で一番気をつかうところは繁殖です。メダカには繁殖に適した時期があり、毎年四月から九月頃までがその時期になります。この時期は毎朝卵を産みます。私の飼育しているメダカも三月の終わりから卵を産み始めました。メダカが産み始めたことを確認してからが大変です。すぐに卵を別の容器へ移さなければなりません。そうしないと卵をメダカ達が食べてしまうのです。しかも、メダカが卵を産む時間帯は早朝なので、うっかり寝坊をしてしまうと卵が食べられてしまいます。卵を産んでからもひと手間かかります。メダカは卵をすぐ水草につけるのではなく、しばらくは体につけているので、この親メダカを網ですくい、筆を使って卵を体から離します。そうしてやっと卵の世話に入ります。

卵の世話にも多くの観察や作業が伴います。白く濁った卵、それらは無精卵や、途中で死んでしまった卵です。これを丁寧に取り除く必要があります。なぜならその白さの正体は水カビだからです。恐ろしいことに、正常な卵にも水カビがうつり、元気だった卵が死んでしまうこともあるのです。実際、カビの生えた卵を完全に取り除くことが出来ず、すべての卵にカビが蔓延し、全滅してしまったことがあります。

こうした苦労を経て卵から誕生した稚魚も成魚になるまで生き残れるものは、ほんのひと握りです。餌がうまく食べられないメダカや、うまく泳げないメダカ、弱い体質のメダカは死んでしまい、全体の五分の一ほどしか生き残れません。やっとの思いで育てたメダカを先日、親メダカのいる水槽に放しました。成魚も稚魚も関係なく楽しそうに群れをつくって泳いでいるのを見て、とてもわくわくし、何度見ても飽きませんでした。ここまで上手に飼育できるようになるまでに多くの失敗がありましたが、特に忘れられないのは成魚のメダカを死なせてしまった次の失敗です。

十月のある日、祖母が遊びに来るというので、汚れたままの水槽を掃除することにしました。特に砂利を洗ったことがなかったため、汚れがひどく、何度洗っても水アカやぬめりが落ちないほどでした。納得がいくまで洗い続け、やっときれいになり、祖母にも「綺麗だね、頑張って育てているね。」と言われ、私は得意顔でした。しかし数日後の朝、私が手間をかけ大切に育てたメダカがたくさん死んでいたのです。水槽をのぞくと、水面には油が浮き、膜が張っていました。原因を考え、私はハッとしました。数日前、水槽を掃除したときは砂利の中にたくさんいた貝がいなくなっていたのです。私が砂利を洗うときに貝も一緒にごしごしとこすってしまい、結果、貝を殺してしまったのでしょう。その貝の死がいが腐り、油となって水面に浮いたため、メダカが窒息してしまったのだろうという結論に至りました。数多くのメダカを死なせてしまったため、墓を作って埋めたときのことは、とても悲しくて忘れられません。せっかく手間をかけて育てたのに…という無念さで胸がいっぱいになりました。

何となく始めたメダカの飼育。しかし、メダカがどうやったら増えるのか、メダカにとってどんな環境が良いものなのか、育てているうちに考え始めている自分に気が付きました。今では本を読んでみて、「次はこんなことを試してみたい。」という好奇心でいっぱいです。

昨今、川の水質や水路自体がコンクリートに変わったことで、住処を追われた野生のメダカがどんどん姿を消しています。思いがけずメダカの飼育を始めた私ですが、自分の住む北上市にいるメダカを保護したいと思うようになりました。そんな私の今の夢は、新しい品種のメダカをつくることです。メダカの飼育が広がってきたのは、まだほんの五十年ほどなので、新しい品種をつくり出す可能性が十分にあると思うのです。少し時間はかかるかもしれませんが、私に出来ることを考え、挑戦し、この夢に近づいていきたいです。

作文を書くに当たって

メダカをくれた方の言葉がきっかけに、この作文を書きました。それは「繁殖させるのは簡単だけど、その後の個体の管理は難しいよ。」という言葉でした。だから、自分なりに成長に合わせて管理を工夫していることを表現しました。メダカ飼育の難しさと、生物保護を続けることの大切さが読んだ方に伝わったら嬉しいです。